

出府挨拶

一 弟 宗 存 氏 宛

信 寄 届 時 是 日 登 程 候

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

松 平 啓

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

高 崎 市 内 桐 生 氏 宛

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

事 候 事 候 事 候 事 候 事 候

東部、京俗、方、あり

而、高、侍、あり、  
章

？、現、あり、あり、あり、

侍、あり、あり、あり、あり、

高、あり、あり、あり、あり、

義、あり、あり、あり、あり、

了、あり、あり、あり、

所、あり、あり、あり、あり、

了、あり、あり、あり、あり、

あり、あり、あり、あり、

了、あり、あり、あり、あり、

了、あり、あり、あり、あり、

下... 乃... 呼

亦... 紋... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

林... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

【本文解説文】

一 筆啓上仕候、先以  
僖御機嫌克御座被遊  
恐悦至極ニ奉存候、随而

私義

無事罷在候、乍憚

御安意思召可申上候

當月上旬、桐生出立仕

東都京橋ニ而又々

両手寄セ仕、罷在候、其節

御窺ニ、不罷出ニ付出府

仕、寔ニ本意背之段

寔ニ申訳ケ無之、此段

幾重ニも御用捨被遊

可申上存候、

御町役人様御序之砌

可然御傳聞、伏而希上候

又々後使ニ委細

申上候、今日、取込用事の己

乍憚御内寶様へも

可然奉希上候、早々

頓首

八月廿九日

林 琳 齋

拝

長 沢 新 助様

貴答下

【本文読み下し】

一 筆啓上つかまつり候、先ず以つて  
僖よろこびご機嫌よくご座遊ばされ

恐悦至極に存じ奉り候、したがって私義わたくし  
無事まかりあり候、憚はばかりながら

ご安意思し召し申し上げべく候

当月上旬、桐生出立つかまつり

東都京橋にて又々

両手寄せつかまつり、まかりあり候、其節

お窺うかがいに、まかり出ずに付出府

つかまつり、寔まじしに本意(に)背きの段

寔まじしに申し訳けこれなく、この段

幾重にもご用捨遊され

申し上ぐべく存じ候

お町役人様お序の砌

然るべきご伝聞、伏して希み上げ候

またまた後使いに委細いさい

申し上げ候、今日、取り込み用事のみ

憚ながらご内宝様へも

然るべき希み上げ候、早々

頓首

八月廿九日

林 琳 齋

拝

長 沢 新 助様

貴答下

## 【解説】

お正月ということで相応しい文書を探そうと出題したのですが、年始のあいさつでは皆さんは物足りないと思います、この書状を選びました。何の気なしに取り出したのですが、やはり古文書はなめて掛かれないものがありました。この文書は、何か事件絡まりなのでしょう、訴訟か文面からは察することができません。差出人は林琳齋りんさいといい、新町六丁目に住居を定めています。『桐生市人物事典』によりますと、文政年中、江戸へ上り、関八州取締役出役の手先となり活躍。そのかたわら操り人形を修業し名手として知られたようです。天保十二年（一八四一）帰郷し、兄の長右衛門の家督を継承し、操り人形を業として生活をしていました。明治五年（一八七二）に亡くなったとあります。

きわどい内偵をしたのでしょうか、罪なき人を上告したのでしょうか、分かりかねますが、危ない橋を渡らなければならない渡世を生きただと考えられます。諸国行脚に制限がある時代、操り人形師ならば誰も疑いません。実際はどこぞの回し者とと見ていましたが……。宛名の新助は幕末ならば、正緒に比定されます。天保十年（一八三九）以前ならば元緒となりますが、分かりかねます。江戸での滞在やらの費用を新助が負担したのでしょうか、新助の意に反して裏切る結果となり申し訳ないといっています。

最後になりましたが、冒頭の書き出しの文言は、「一筆啓上火の用心」の浸透とともに「いっぴつつけいじょう…」と流布された傾向と思われませんが、別に間違いではなく、そのまま「いっぴつ」と読んでよいでしょう。しかしおんな文字、仮名文字の書き方から連想すると「ひとふで」と読むようです。念のため理解しておくことも必要です。また、「一筆」ですが、書き出しの定番で、一筆と書きますが、長年の慣習がそうさせたのでしょうか、「一」と「筆」の間を空けて文章を綴っているのは、何故なのでしょう、いろいろな理由は考えられますが、「一」という文字が辞典でも最初に出てくる貴重な文字でしかも単純、この上ない原点としても文字の神秘性というか特別な文字であるため、「ひとつ何々」の間を空けた区切りとも考えられます。如何でしょうか？神意や上様（この場合、徳川将軍）の言葉が次に出てくる場合は、改行や頭出しをして敬意を表していました。お正月を迎えました。この正月に「お」を添えるのも日本独特の文化なの

でしょうか。英語の頭文字が大文字になるのも、そういった文化・風習なのでし  
ょうか。念頭にあたり頭をひねってみましょうか。

#### 【用語解説】

今回は、これといった用語解説はする必要がありませんでした。ご承知かとは思  
いましたが、次の用語を列挙してみました。

【出府】(しゅつぷ)：公務(訴訟など)で江戸へ行くこと。反対語としては帰府きふ。

【東都】(とうと)：江戸の町を称していった。辞典では「東の都」。江戸は他  
も江戸こうふ・江都こうと。江戸の異称。明治初期には東京を「とうけい」とも言った時期が  
ある。文字の口が日になって使われた(京)。

【内寶】(ないほう)：内室(ないしつ)と同じ意味で使う。他人の妻に対する敬  
称。

引用は『古文書用語辞典』(柏書房)・『桐生市人物事典』ほか